

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

五感で愉しむ伊福部昭ピアノレクチャーコンサート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 甲田, 潤 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/940

五感で愉しむ伊福部昭ピアノレクチャーコンサート

東京音楽大学付属民族音楽研究所 専任研究員

甲田 潤

2014年12月11日(木) 17:15- 東京音楽大学付属図書館1階ロビー

1. はじめに

2014年は、日本を代表する作曲家で教育者でもある伊福部昭先生の生誕100年に当たります。その記念すべき年に、図書館で先生に関する展示を行いたいという相談を受け、民族音楽研究所と私個人が所有する先生由来の品々を見ていただくことにしました。

その過程で、何か目玉になるものはないか? と思い、伊福部家の方々に相談したところ、長女の伊福部玲さんからは先生の代表作である『シンフォニア・タブカーラ』¹の初演に使われた自筆譜を、また、長男の伊福部極さんからは先生が生前愛用していたピアノを貸していただくことが出来ました。

今回は、展示されている先生愛用のピアノを実際に鳴らしながら、先生の作品を解説したいと思っています。

伊福部先生は、東京音楽大学の作曲科教授でもあり、のちに学長も務められました。また、民族音楽研究所の所長として長年勤務され、亡くなった後も名誉所長となっております。

私は、高校3年生の時、木管四重奏曲の卒業作品を先生に指導していただくことになりました。今は建てかえられました、以前のA館の学長室で、少し威厳のある目で作品を見ていただいたのを覚えています。

その後、研究所で一緒に、先生がお亡くなりになる直前まで働くことになりました。とても大切な思い出です。

今年は先生の生誕100年ということで、出版物やCDなどのたくさんの資料が発売されました。また、記念のコンサートの開催、そしてNHKの特別番組などが放送されました。今年に限らず来年以降も資料の出版や演奏会が企画されているようです。現在、先生の作品は改めて注目されている状況です。

今回展示されているピアノは、先生のご自宅の書斎に置かれていたピアノで、多分先生が尾山台の自宅に引っ越されてからは一度も外に出たことがなく一般の人の目にふれることがありませんでした。その意味でも、今回先生が教鞭を取っていた母校の図書館に展示されるというのは、とても意義深いものだと思います。

¹ 1954年に作曲された伊福部昭の代表曲。1955年1月26日、指揮者ファビエン・セヴィツキーとの文通がきっかけとなり、インディアナポリスにおいてインディアナポリス交響楽団によって世界初演された。展示された楽譜はその初演に使われたもの。日本初演は1956年3月16日、上田仁と東京交響楽団による。その後1979年12月に改訂版が完成し、1980年4月6日、芥川也寸志と新交響楽団によって改訂版が初演された。

このピアノは 1915 年から 1920 年の間に作られたハンブルクの Rachals² 社製のアップライトピアノで、伊福部先生の長兄にあたる伊福部宗夫さんの夫人であるナミさんが所有していたものを買収られ、生涯使われていたピアノです³。製造番号から推察すると、作られてからおよそ 100 年経っています⁴。



先生からこのピアノについて、色々なお話をうかがいました。

先生のお宅は木造の 2 階建てで、音が筒抜けになってしまうので、先生の奥様がお近所に対して音を気にされるので、先生は夜中にこっそりとピアノを弾くことが多かったそうです。

作曲家の多くはグランドピアノを使っているようですが、先生は生涯このアップライトピアノを使って作曲されました。

先生は晩年、少し耳が遠くなっていたご様子で、補聴器を使用されることもありましたが、先生がお使いの補聴器は音の調整が難しかったみたいです。

² 1832 年ハンブルグで創業したピアノ製作会社。1952 年頃までは現存していた。

³ 木部与巴仁『合本伊福部昭音楽家の誕生；タップカーラの彼方へ』（朝霞：本の風景社，2004 年），221 頁。

⁴ Bob Pierce and Larry E. Ashley. *Pierce piano atlas*, 10th ed. (Long Beach, California : Bob Pierce, 1997), 280.

先生の耳が不調だったこともあり、ピアノが古くて調律が上手くいってなかったこともあって、ピアノの低い「mi」の音と「fa」の音では「fa」の音の方が低くなっていたと周りの人が言うのに、先生は「ちゃんと調律が合っていて『fa』の方が高く聞こえるんだよ」なんておっしゃっていたのを覚えています。

先生にとっては、正しい調律の楽器よりも、心の中に響いているご自身が思う正しい音の方が大事だったのではないのでしょうか。

本日はピアノの状態があまり長時間の演奏に耐えられないこともあり、ソツと弾くことにはなりません。先生作品の一部を実際に鳴らしながら解説したいと思います。

2. 『ピアノ組曲』

先生の作品の中で、公表されている最初の作品は、1933年18～19歳の時に作曲された『ピアノ組曲』です。

先生は中学生の頃から作曲を始めていたのですが、『ピアノ組曲』以前の作品は、現在ほとんどが所在不明になっています。

この『ピアノ組曲』が作曲された経緯には、先生の中学時代からの友人であり後に音楽評論家になった三浦淳史⁵さんが大きく関わっています。

当時音楽を聴くというのは、喫茶店などでSPレコードを聴くことが主な情報源でした。その中で、スペインのピアニストであるジョージ・コープランド⁶さんの演奏が音楽評論誌で酷いと話題になっていました。そんな酷い演奏なら聴いてみようかと先生と三浦さんで聴いてみたところ、とても良い演奏だと二人は思われたそうです。

そこで英語が堪能な三浦さんがコープランドさんに手紙を書きました。その後コープランドさんから手紙が届き「地球の裏側で僕の演奏が理解出来る人がいるのは素晴らしい。そんな素晴らしい人物の周りにはきっと作曲家がいるだろう。作曲家ならピアノ曲があるはずだから、その作品を送って欲しい」と書いてありました。

三浦さんは「僕の友人で伊福部昭という人がいる。まさに今ピアノ曲の作曲中で、出来上がったらただちに送るのでよろしく頼む」という手紙をコープランドさんに送りました。

伊福部先生には「こういう手紙を書いたのだから、曲を書かないと国際問題になる」と言って、曲を書くようにうながしました⁷。

先生は、作曲の先生について作曲の勉強をしたことがなかったので、「さて、どうしたものか」と考えられ、とりあえず書店に行って作曲法の本を買おうとしました。しかし、どれも厚い本だったのであきらめ、隣にあった「和声学」の本を見たら「禁則」という、やってはいけないことが書いてあるページに目が留まりました。そこでこの「禁則」を用いて曲を作ってみようと思いついたのが『ピアノ組曲』作曲の一つのモチベーションになったそうです。

⁵ 1913年11月1日-1997年10月13日。秋田市生まれの音楽評論家。イギリス音楽の第一人者として知られた。

⁶ George Copeland 1882-1971。スペイン生まれのピアニスト。

⁷ 木部与巴仁『合本伊福部昭音楽家の誕生；タップカーラの彼方へ』（朝霞：本の風景社、2004年）、86頁。

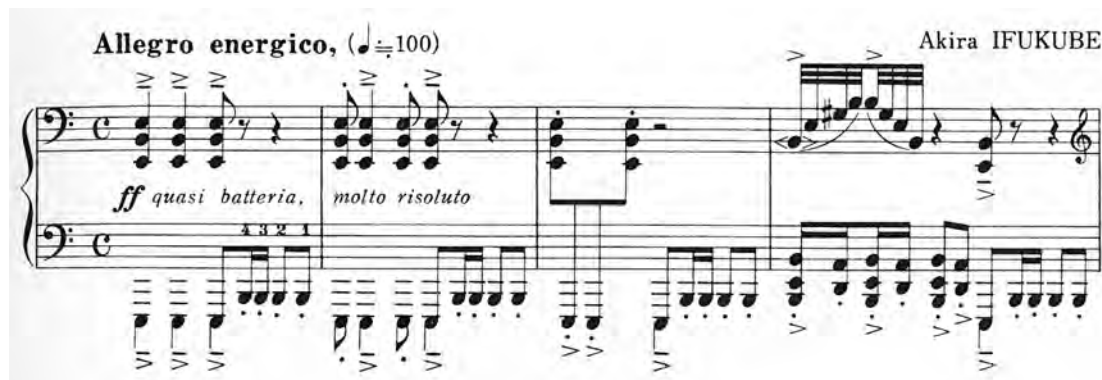
連続5度などの「やってはいけないこと」を用いることでも、面白いものが出来るのではないかと、と思いつく先生の着眼点が素晴らしいと思います。また、後にこの曲が他の編成に編曲された際に『日本組曲』と名前を変えることになったように、西洋の音楽の規範に捕らわれない、日本の自分たちが持っているメロディーを大胆に用い、そして日本独自のエネルギーを音楽にしようと作られた曲だとも思っています。

曲はバロック時代の組曲のように舞曲が連なるスタイルになっています。この『ピアノ組曲』は、お祭りを題材にした曲で、背景には人々がお祭りで集まって踊るための曲というのが考えられると思います。

それぞれ、『盆踊 (ぼんおどり)』『七夕 (たなばた)』『演伶 (ながし)』『佞武多 (ねふた)』というタイトルがついています。2曲目の『七夕』は子守歌のような曲に、3曲目の『演伶』はバルカローレ風な曲になっています

『盆踊』から見てみましょう。見てわかるように、出だしの部分は日本の太鼓のリズムを用いています。

【譜例 2-1】



出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』全音楽譜出版社，c1969年），5頁。

日本人だから、この最初の「ダーン、ダーン、ダッダダダ」というリズムが刻まれると、「これは私たちの太鼓のリズムだ」ということがすぐわかると思います。

例えば、ピアノを弾かれる方ならショパンを弾くと思うのですが、ショパンのマズルカを聴いて「ああ、あのリズムね」って直ちに納得するのは少し憚られると思うのです。なぜならそれは、私たちがポーランド人では無いからです。多くの日本人にとって、それは勉強して、体得するリズムであって、自然と「マズルカのリズムだ」と思うことは出来ないと思われます。でも、先生のこの『盆踊』の冒頭のリズムを聴いて、日本人だったらすぐに「ああ、これはあの盆踊りの時の太鼓のリズムだ」と感じる事が出来るし、どんな太鼓をどんな感じに叩くのかもわかると思うのです。

もちろんトレーニングを積んで西洋のリズムを上手に演奏することは出来るようになるだろうけれど、日本の太鼓のリズムは最初から自分たちの中に刻まれていて、最初の「ダーン、ダーン」ってい

う和音の部分と「ダッダダダ」という細かい刻み方をどのように演奏したら良いのかは、実際にはトレーニングすることが必要かもしれませんが、おそらくより合点の出来ることだと思います。

それは、日本人のDNAの中に、自然に流れているものだと先生はおっしゃっていました。それが、最初期のこの作品の出だしの部分に表現されていて、その後の先生の作品にも通ずる特徴にもなっています。

この太鼓のリズムの後に、笛のメロディーが始まります。

【譜例 2-2】

Musical score for Example 2-2, showing piano accompaniment. The score is in G major and 4/4 time. It features a complex rhythmic pattern in the right hand with triplets and accents, and a steady eighth-note accompaniment in the left hand. Dynamic markings include *p subito, ma ritmico*, *mf*, and *f*.

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），5頁。

バスの音は「mi」の音が続くのですが、メロディーは「fa」の音から始まり、後に先生はフリギア旋法⁸がお好きだとおっしゃっているのですが、それに近い旋法が現れています。

後の部分には、先ほど言ったように連続5度の連続なども多用されています。

【譜例 2-3】

Musical score for Example 2-3, showing piano accompaniment. The score is in G major and 4/4 time. It features a continuous sequence of chords in the right hand, each a fifth above the previous one, and a steady eighth-note accompaniment in the left hand. Accents are placed on the notes of the right hand.

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），10頁。

続いて2曲目の『七夕』ですが、この曲の出だしも連続5度の連続になっています。

⁸ 教会旋法の一つ。構成音は「mi-fa-sol-la-si-do-re-mi」。第2音の「fa」が下行導音になっているのが特徴。

【譜例 2-4】

Musical score for Example 2-4, titled "Lento tranquillo, (♩ = 54)". The score is written for piano in 2/4 time with a key signature of three flats. It features a melodic line in the right hand and a bass line in the left hand. The tempo is marked "Lento tranquillo" with a quarter note equal to 54 beats per minute. A dynamic marking "p" is present in the first measure.

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），12頁。

この部分を聴いても、全然違和感がありません。むしろ、倍音を意識したとても澄んだ綺麗な響きがすると思います。

また、この曲にはピアノ演奏では不可能なポルタメント⁹の指示が書かれている部分があります。後に他の楽器に編曲された経緯を考えると、この不可能な記述は革新的であったとも思えるのです。

【譜例 2-5】

Musical score for Example 2-5, starting with "(8va)". The score is written for piano in 2/4 time with a key signature of three flats. It features a melodic line in the right hand and a bass line in the left hand. The tempo is marked "Lento tranquillo" with a quarter note equal to 54 beats per minute. A dynamic marking "p" is present in the first measure. A "sostenuto" marking is present in the fourth measure. A performance instruction "(ma non tanto)" is written below the bass line.

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），15頁。

3曲目の『演伶』は新内節¹⁰をイメージして書かれた曲と言われています。1曲通して見ていただくとよくわかるのですが、先生の書かれるメロディーは音が非常に少ないです。この曲ではそれが極まっていると思います。

この頃はヴァイオリンのような弦楽器を弾く門付けの流しも多かったみたいで、そのような雰囲気を感じさせるメロディーもあります。

⁹ ある音から別の音に移る際に、滑らかに徐々に音程を変えながら移る演奏技法。もちろんピアノでは表現不可能。

¹⁰ 鶴賀新内（正徳4年（1714年） - 安永3年（1774年））が始めた浄瑠璃の一流派。浄瑠璃の豊後節から派生したが、舞台から離れ、花街などの流しとして発展していったのが特徴。哀調のある節にのせて哀しい女性の人生を歌いあげる新内節は、遊里の女性たちに大いに受け、隆盛を極めた。（ウィキペディア）。

【譜例 2-6】

Quasi burlesco, (♩ = 112)

f

ff molto risoluto

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），16頁。

リズムも、記譜上は鋭いものですが、実際は日本人独特の緩い三連符に近い優雅なリズムで弾くのが正しいと思います。

さらに「la」と「si」だけのメロディーが続く部分。

【譜例 2-7】

ff

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），18頁。

西洋の音楽では、これだけ音が少ないメロディーが続くというのは、ちょっと考えられないと思います。こういう部分にも、日本人共通の美意識のようなものが感じられるのではないかと思います。

4曲目、終曲の『佞武多』ですけども、ご存じのように青森のねぶた祭を題材にしています。先ほど、先生は専門的に作曲を勉強したことが無かったと言いましたが、実際に分析するとものすごく高度な作曲技法が使われていることがわかります。

【譜例 2-8】

Marciale pesante, (♩ = 96)

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），23頁。

例えば、音量の設計を見ていくと、出だしはメゾ・ピアノのから始まって、大ききの行き先は指定されてないのですが、多分2小節目でメゾ・フォルテになり、また元に戻る。そして、3小節目は1段上がってメゾ・フォルテから始まって、多分4小節目でフォルテになりまたメゾ・フォルテに戻る。次に5小節目でまたメゾ・フォルテから始まって、フォルテになり、メゾ・フォルテに戻り、7小節目はフォルテから始まってフォルティッシモになり、フォルテに戻るという設計になっています。これは計算された設計だと思えます。

次に、和声的な面を見てみると、出だしがc-mollのIVから始まるのですが、この和音が第一転回形になっています。第一転回形は基本形のどっしりとした安定感に比べて、少し軟らかい響きを持っていますが、この部分の音は非常に密になっていて、厚い響きがします。

その先、9小節目になるとc-mollのIの和音になるのですが、基本形ではなくて第二転回形になっています。これは、不安定な響きがして、ちょうど片足で立っているような不安定さがある和音だと思えます。この部分は最初と比べると音が少ない響きになっています。

【譜例 2-9】

9

13

17

21

p *ff* *f* *mf* *mp* *p* *mp*

(accento di melodia, non tanto)

ben marcato il canto di mano sinistra

出典：伊福部昭『ピアノ組曲 = Piano suite』（全音楽譜出版社，c1969年），23-24頁，。

11小節目で、また出だしと同じ厚い響きの第一転回形になり、13小節目で第二転回形の響きになります。15小節目からだんだんと調性を確立していき、17小節目でやっと、c-mollの基本形になり、安定してどっしりとした響きに至ります。

出だしの部分を調性のIの和音の基本形で始めず引っ張っていくというのはよくある手段なのですが、先生の特徴が現れているのは、実はその次の19小節目にあると思います。やっとIの和音の基本形が出てきて安定したのに、テーマとなるメロディーの出現する19小節目ですぐにまた第二

転回形の和音になり、しかもそのメロディーに c-moll の構成音には無い「la♯」の音が現れます。分析すれば、この音はドリア旋法¹¹ということになるのですが、この「la♯」の音は摩訶不思議な音です。ドリア旋法の音だということでは無く、ある意思を持った特別な音だと思われます。それは、調性の錯乱とも言え、『盆踊』の最終場面に現れる E-dur と e-moll の同時出現と関連するような多調性の混乱を意識させると思われるのです。

こういった作曲上の工夫を見ると、当時の先生は作曲の勉強をしたこと無いとされていますが、とんでもないことで、素晴らしい計算の元に曲を構成していることがよくわかります。

先生が 18～19 歳の時に作られたこの曲は、先生が 77 歳の時に『日本組曲』¹²として全体が 3 管編成の管弦楽に編曲されました。管弦楽版を聴いていただければわかるのですが、ふつうはピアノ曲を管弦楽化するにあたって、声部を足したり対旋律を付けたりするのですが、そういうことを一切していません。『ピアノ組曲』には、ピアノで弾くと多少弾きづらい箇所があるのですが、『日本組曲』ではその部分が効果的に響きます。

先生の中では、明らかに、管弦楽としても成り立つ設計が、この『ピアノ組曲』を作った時点で流れていて、それを読み取ることが出来ます。

3. 映画音楽『ゴジラ』

続いて、先生の代表作である映画音楽の『ゴジラ』についても、少しお話ししたいと思います。

まずは『ゴジラ』のテーマを見えます。

【譜例 3-1】

The image shows a musical score for the Godzilla theme in G major, 2/4 time. The melody consists of 12 measures, with measure numbers 1 through 12 circled above the staff. Measures 2, 3, 4, 5, and 6 are grouped together with a bracket and a '3' above them, indicating a triplet. Measures 7, 8, and 9 are grouped with a bracket and labeled 'A'. Measures 10, 11, and 12 are also grouped with a bracket and a '3' above them, indicating another triplet. The final note in measure 12 is circled with a '2' below it, indicating a second ending.

伊福部昭『ゴジラ』より

先生は、「ゴジラというのはこの世のものではないもの、人間と違うもの。人間と違うものの音楽は調性で表さない」とおっしゃっていました。

なので、このテーマを分析してみると 12 の別の音、つまり 12 音で書かれていることがわかります。

でもちょっと、3 音足してある (A の部分)。なぜか?というのを先生に聞こうと思っていながら、忘れていました。私が考えるには、多分、下降半音階を 3 つ足すことでいくらか情緒的になることと、画と合わせたときに尺が足りなかったのではないかと思うのですが、真相はわかりません。

¹¹ 教会旋法の一つ。構成音は「re-mi-fa-sol-la-si-do-re」。

¹² 「作曲家の個展 '91 伊福部昭」のためのサントリー音楽財団委嘱作品

「ゴジラのテーマ」というと、次のものを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか？

【譜例 3-2】



伊福部昭『ゴジラ』より

実は、これは「自衛隊のテーマ」と言われていたのですが、今では「ゴジラのテーマ」というとこちらを思い浮かべる方が多いかもしれません。

このテーマを見てみると、「タタタン、タタタン、タタタタタタタン」のリズムなのですが、この「タタタン」というリズムが最初の「タタ」にアクセントがあり強拍が来ることがわかります。

でも、これを外国の人が聞くと「タタ」がアウフタクトに聞こえ、「タン」の部分に強拍が来るように聞こえるそうです。

例えばモーツァルトの交響曲第 40 番の出だしのよう聞こえるのかもしれない。

【譜例 3-3】

Musical score for Example 3-3, showing the beginning of Mozart's Symphony No. 40 for Violino I, Violino II, Viola, and Violoncello e Basso. The score is in G minor, 2/4 time, and starts with a piano (p) dynamic. The Violoncello e Basso part is notably silent in the first few measures.

出典：Wolfgang Amadeus Mozart. Sinfonien, Bd. 9. Vorgelegt von H. C. Robbins Landon (Kassel : Bärenreiter , c1957), m. 63 (弦楽器部分)

『ゴジラ』を演奏してみると、この「タタタン」の「タン」の部分で一回止まるように演奏したくなります。

日本人なら「タタ」に強拍が来て、この「タン」の部分で一回止まるように感じられるのですが、西洋的な演奏解釈をするとこの「タン」は次の部分につなげるようにはねて演奏してしまうのです。

ちゃんと音を降ろして止まるのと、次に進むために上げて止まるのでは違ったものになってしまいます。

もう一つ、『ゴジラ』の最後の部分の楽譜を見えます。

これはエオリア旋法¹³で書かれた曲です。

¹³ 教会旋法の一つ。現代の自然短音階に近い。構成音は「la-si-do-re-mi-fa-sol-la」

【譜例 3-4】

Coro

やすらぎよ ひかりよ とくかえれかし

Pno.

出典：伊福部昭『ゴジラ』，和田薫編纂（東宝ミュージック，2014年）

出だしはIVの和音からIの和音に解決するアーメン終止になっています。歌の出だしも、「やすらぎよ」という歌詞にそって、祈りを表現するようにアーメン終止の和音が選ばれています。

全体的にアーメン終止のIVからIの和音に下がるという進行が使われているのは、多分、祈るという行為が頭を垂れるという所作と対応しているのではないのでしょうか？

21小節目からの「やすらぎよ ひかりよ」の部分では、IIIの和音が特殊な第一転回形で使われていて、とてもやさらかな響きがします。この部分は、アーメン終止の下がる進行と違って、上に上がったような感じがします。

【譜例 3-5】

Coro

めでて やすらぎよ ひかりよ

Pno.

出典：伊福部昭『ゴジラ』，和田薫編纂（東宝ミュージック，2014年）

このように、映画音楽を見ても、先生は音楽的に意味を持った音遣いをなされていることがよくわかります。音楽の本質と深く関わっている非常に根源的なことがたくさん見えてきます。

4. おわりに

伊福部先生から本当に様々なことを学びました。

エピソードをひとつ。1991年、民族音楽研究所を現在の場所で開設するにあたり、その館銘板を玄関に掲げようと言うことになりました。それはヨコ110cm、タテ60cmのエッチングに依るもので、東京音楽大学本部の館銘板よりはるかに大きいものでした。「文字は日本文字が太ゴシック、若しくは特太ゴシック、横文字はフーツラメディウム (futura medium) (E16-24) で作って下さい」と、先生はその場で指定なさったのでした。

今でこそフォントという言葉は一般化され、その意味も指定する字体も理解出来る単語であるのですが、いまから四半世紀の前「フーツラメディウム」と言う単語が理解出来る方は、少なくとも私たちの民族音楽研究所には、先生以外においでになりませんでした。

先生はよく、「自分は時代の時計から違う進み方をしている。でも止まった時計でもそこにじっとしていれば、必ず一日に一度は必ずびたりとその時間に合う時がやって来る。時代に追われ、追いつけることなく、自らの立ち位置を定め揺るがないこと」という様なことを仰っておられました。

私はそうではなく、先生はひょっとしたら私たちよりトラックを何周か早く廻っていたのではないかと思うのです。私たちの世代より何代か先の世代の人であったのではないかなと思えてくるのです。

先生はありとあらゆることに長けておいででした。人類の長い歴史をその目でご覧になったのかと思うくらい、世界の歩みを時と場所、関わった人々を、更にそれらに学び次へ進むべき道を、いつも詳しく説いて下さいました。

先生は歴史に学び、先人の知恵を更に広げて、ご自分の智慧として持たれておいでになったのです。これこそ、人類の発展の証ではないでしょうか？

周回遅れの、世代遅れの私たちは、未だ先生のお考えを広げられずにいます。このままでは人類の後退が始まってしまう恐れさえ感じるのです。

世界のグローバル化が叫ばれる中、卒寿を迎えた演奏会のプログラムに寄せた先生の「グローバルイズムのような単一な価値観ではなく、夫々の異文化が互に理解と敬意をもって共存し得る時代の到来を希って止みません。」というご挨拶を思い出します。

その他にも先生の遺された、「その民族、または地域の特殊性を通過してのち、共通な人間性に到達すべきものであると考えている」や、「真に広い全人類的な訴えをもつためには、先ず第1に自己に身近な地域的なもの、卑近なものに美を見だし、感動し得るような自主的なすなおな美感によらなくてはならない」などの言葉は、憧憬と逃避により培われるような美観でなく 真に文化あるいは芸術の完成を目指す音楽や人間の智慧をあらためて検証し、そこからさらに高まった美の活動をするための貴重な道標となります。そのことを先生は教えて下さったに違いないのです。

自らの無教養をさらしてしまうので本当に恥ずかしいのですが、正直なところ、先生の遺して下

さった、古きを語り、今を詠み、未来を予感させ得る様々なお話しの意味することについて、どのくらいが本当に理解出来ているのかなと思ってしまいます。

日常の簡単なことでさえ、先生のお側での正しい身の振る舞いは如何なのか、まるで鏡に写る自らの姿を見るように、先生がそこにおいでになるだけで、鮮明に至らぬ所が見えてきます。

例えば、民族音楽研究所で先生に報告しようとした時、先生に正しい日本語で、正しい報告が出来ない自分に驚きました。書類に正しい文字で、正しい報告が出来ない自分がそこに居ました。先生に対してどの位置に自らが立ち、どのような声で、どのような口調でお話しお伝えすればよいのか、本当にひとつも正しいことが出来ない自分が見えたのです（この「正しい」という言葉は、「美しい」という言葉にも置き換えられるのですが）。もちろん、先生は何も仰いません。

民族音楽研究所で先生のお側で過ごした15年間、私の車での日々の送り迎えの車中でも、先生は一度もお休みになられたことがありませんでした。いつも助手席で愛用のダンヒルのインターナショナルの煙を燻らせながら、音楽談義が尽きることはありませんでした。

そしていつもの行きつけの中華料理屋さんに寄り、ビールとなまこのスープ、えびシュウマイと、かにシュウマイ、そして五目そば、それぞれ取り分け用の大皿一枚ずつを召し上がって、お帰りになるのです。

当然、お年を召された方にありがちな、身体のあちらが痛い、こちらが痛いなどと云うことはひとつも伺ったことがなく、いつも悠然、泰然としておられるお姿に、いつしか私は、先生は絶対に不死身なのだと思います。

しかし今から8年前、2006年2月8日に、伊福部先生は僅かな病床の後に、彼岸へと旅立たれてしまいました。あの冬は確かにいつもの冬に増して寒さは厳しく、しかしお別れの冬の陽は、何より参列の皆に対して暖かだったことを覚えています。

その頃は、先生とお電話でお話しさせていただくことが多く、いつも最初に受話器の向こうから聞こえてくる先生のお声は、少しお元気がない無理をさせられないお声でした。ところがこちらが名乗ると、声色がガラッと趣を変えて、先生の独特のお元気な力強い響きが変わっているのです。

思えば先生の謂の許にお供させていただく毎日を過ごせた学生時代からの30余年でした。この時の流れは先生のお言葉をお借りするならば「私の人生の中においては、些か長い時間」なのです。この先も先生の遺して下さった音楽とお考えを大切にしながら、日々新しく過あたらして行ければと思います。

今回の稿を起こすにあたり、東宝ミュージック株式会社 取締役社長岩瀬政雄氏、東京音楽大学付属図書館 事務長稲葉良太氏、日本データベース開発株式会社 鳥海高広氏の皆さまに多くのお力をいただきました。この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

参考文献

・ 楽譜

伊福部昭. 『ピアノ組曲 = Piano suite』. 全音楽譜出版社, c1969 年.

伊福部昭. 『日本組曲 : 管弦楽のための = Japanese suite : for orchestra』. 全音楽譜出版社, 1997 年.

伊福部昭. 『ゴジラ』. 和田薫編纂. 東宝ミュージック, 2014 年 (未出版).

Mozart, Wolfgang Amadeus. *Sinfonien, Bd. 9*. Vorgelegt von H. C. Robbins Landon. Kassel : Bärenreiter , c1957.

・ LP

伊福部昭. ピアノ組曲. 米田栄子 (ピアノ). 『現代日本の音楽』 1 『ピアノ曲 1』. 東京音楽大学 TCM-001, [1979?] 年 (非売品).

・ 書籍

Pierce, Bob, and Ashley, Larry E. *Pierce piano atlas*, 10th ed. (Long Beach, California : Bob Pierce, 1997)

木部与巴仁. 『合本伊福部昭音楽家の誕生 ; タプカーラの彼方へ』. 朝霞 : 本の風景社, 2004 年.

木部与巴仁. 『伊福部昭の音楽史』. 春秋社, 2014 年.

小林淳. 『伊福部昭音楽と映像の交響』. 上・下. ワイズ出版, 2004-05 年.

小林淳編. 『伊福部昭綴る—伊福部昭論文・随筆集』. ワイズ出版, 2013 年.

相良侑亮編. 『伊福部昭の宇宙』. 音楽之友社, 1992 年.

・ インターネット

「伊福部昭」. ウィキペディア日本語版. 2015 年 3 月 9 日アクセス.
<http://ja.wikipedia.org/wiki/伊福部昭>

「新内節」. ウィキペディア日本語版. 2015 年 3 月 9 日アクセス.
<http://ja.wikipedia.org/wiki/新内節>

「三浦淳史」. ウィキペディア日本語版. 2015 年 3 月 9 日アクセス.
<http://ja.wikipedia.org/wiki/三浦淳史>

い ふ く べ あ き ら

伊福部 昭 (東京音楽大学元学長) 生誕百年記念



伊

愉

五

感

で

福

し

む



部



昭



今年 2014 年は東京音楽大学元学長・伊福部昭 (1914-2006) 先生の生誕 100 年に当たり、記念の演奏会やテレビ番組、書籍の発行などが相次いでいます。

伊福部先生は、『シンフォニア・タブカーラ』や『ピアノ組曲』など多数の芸術音楽、『ゴジラ』や『ビルマの豎琴』といった映画音楽の作曲家としてだけではなく、『音楽入門』や『管絃楽法』といった著作でも素晴らしい功績を残されました。

また、東京音楽学校 (現東京藝術大学) をはじめ、本学作曲科主任教授、同学長、同民族音楽研究所所長と、教育者としても活躍され後進に多大な影響を与えました。

先生が長年勤めていた民族音楽研究所には、今もご存命だった頃の愛用品が多数残っています。

今回、生誕 100 年にあたり、当館では、先生の作品を中心に展示するとともに、民族音楽研究所協力の下、愛用品も展示して、その魅力に迫りたいと考えました。

伊福部家 (伊福部玲様・安部姜子様・伊福部極様) の皆様に企画の趣旨をお話ししましたところ、ご好意により、本邦初公開となる 1954 年に初演された『シンフォニア・タブカーラ』の初稿の自筆譜や、先生がご自宅で実際に使用されたアップライトピアノを公開することが叶いました。

さらに、豊島ケーブルネットワーク株式会社様のご協力で、今まであまり目に触れることがなかった貴重な演奏会の映像を視聴していただくことができます。

伊福部家 (伊福部玲様・安部姜子様・伊福部極様) の皆様、豊島ケーブルネットワーク株式会社様、その他個人所有の資料をお貸しくださった皆様に、心より感謝いたします。

本展示が伊福部先生の多彩な魅力を感じ取るきっかけになれば幸いです。

2014 年 10 月 東京音楽大学付属図書館

特別展示



ピアノ

1915 年から 1920 年の間に制作されたハンブルクの Rahals 社製のアップライトピアノ。

元々は伊福部先生の長兄宗夫氏の夫人が所有していたものを買い取ったもので、このピアノを使って数々の作品が生まれ出された。

「このピアノは普通の人で聞くと“ファ”の音が“ミ”よりも低いうえに、自分にはちゃんと音程が合って聞こえるんだよね」と、晩年冗談めかしておっしゃっていた。

実際に調律が狂っていることを先生はご存じだったが、心の中にある音を聞いている先生にはきちんと合っているように聞こえていた。ピアノは音を確かめるために、夜中に静かに弾くことも多かった。

参考：『合本伊福部昭音楽家の誕生；タブカーラの彼方へ』木部与巴仁著 (本の風景社) M2.8/If8-3

所蔵：伊福部極氏

『シンフォニア・タブカーラ』(1954 年) の初演に使われた演奏譜

『シンフォニア・タブカーラ』は、友人で音楽評論家の三浦淳史氏に献呈され、1954 年に初稿が完成し、その後 1979 年に改訂された。

今回展示される譜面は、1955 年 1 月 26 日にセヴィツキー指揮のインディアナポリス交響楽団によってインディアナポリスで初演された時に使用された譜面で、指揮者による書き込みや、後の改訂作業に活かされる書き込みなどが記入された大変貴重な資料である。

所蔵：伊福部玲氏

未出版の楽譜

ピアノと管弦楽のための協奏風交響曲について

1942年3月3日、東京の日本音楽会堂で開かれた演奏会「近代日本の作曲」において、指揮 マンフレッド・グルリット、ピアノ 松浦陽子、管弦楽 東京交響楽団により初演されたこの曲は、楽譜もパート譜もすべて中央交響楽団の練習場に保管されていて、45年の空襲で焼けてしまったと聞いていたのです。指揮者のグルリット氏から「あの楽譜は焼けた。済まない。」と終戦前に手紙をもらったりしていました。

ところが1974年7月に、私の東京音楽大学での弟子である永瀬博彦氏が、偶然渋谷のNHKの資料室で稀いパート譜を見つけたのです。私としては何故中央交響楽団にあった楽譜のものか、NHKの資料室にパート譜だけあったのかはさっぱり分かりません。

私はすでに焼失してしまったことを前提に、その後の作品を書いていた訳です。この作品はもうお蔵入りは決めていました。ところが、そのパート譜の存在を知った周田の沢山の方から、その歴史的背景などがどうの何となくも出て口説かれ、楽材の変更などが有ったのですが、取組みながらついに編曲をすることになってしまいました。

この経緯は、やはり東京音楽大学での弟子である甲田潤氏の大変なご尽力により、パート譜から総譜に復元してもらったものであります。

平成十七年九月
伊福部 昭

『ピアノと管弦楽のための協奏風交響曲』(1941年)

パート譜から甲田潤氏が復元した総譜
1942年に東京で初演された後、総譜もパート譜も東京交響楽団(現東京フィルハーモニー交響楽団)の練習所において、1945年に空襲で全て焼けてしまった。ところが、1994年にNHKの資料室で永瀬博彦氏によってパート譜が発見され、甲田潤氏がパート譜を元に復元した。

伊福部先生はこの曲が焼失したという前提で、後の『リトミカ・オステイナータ』や『シンフォニア・タブカーラ』にモチーフを用いていたため、当初曲の復元には反対していたが、最終的には周田の説得の元、曲の復元を了承した。

楽譜に添えられている資料には、復元に至る経緯が記され、先生の自筆サインと印が押してある。

復元された作品は、1997年8月に府中の森芸術劇場どりーむホールで、館野泉ピアノ、大友直人指揮の日本フィルハーモニー交響楽団によって録音された。

また1998年5月28日になかのZERO大ホールにて行われた「東京音楽大学シンフォニーオーケストラ特別演奏会」において、森浩司ピアノ、野口芳久指揮の東京音楽大学シンフォニーオーケストラAによっても演奏された。

所蔵：東京音楽大学附属民族音楽研究所

『日本組曲—絃楽オーケストラのための—』(1998年)

東京音楽大学で伊福部先生の指示により作成された五線紙に書かれている

1934年に、スペイン在住のアメリカ人ピアニストで、クロード・ドビュッシーの親友でもあったジョージ・コーブランドのために作曲・献呈されたピアノ独奏曲『ピアノ組曲』(Piano Suite)を原曲としている。1991年3管編成のオーケストラに伊福部昭本人が編曲した際に、タイトルが『日本組曲』となった。同年2つの二十五絃争のために編曲され、さらに1998年には絃楽オーケストラのために編曲された。

1998年10月14日にカザルスホールで、編曲の委嘱をした兎東俊之指揮の東京音楽大学アンサンブル・エンドレスによって初演された。

所蔵：東京音楽大学附属民族音楽研究所

学長就任時のあいさつ

就任のことば

今日ほど価値観が多様化し、また、情報量が多く、その選択に惑う時代はありませんが学生諸氏はなんとかしてこの混沌をのりきり、一つの世界に到達していただきたいと思えます。

それについて、いささか古めかしいのですが、次の言葉をお贈りします。

「学びて思わざれば則ち罔(くら)く、思ひて学ばざれば則ち殆(あやう)し」

(論語)

これは、いくら技術や学問を修めても、これについて深く哲学することがなければ単なる技術や知識に留まり、また一方、ただ空論のみをたたくかわり、学問や技術の錬磨がなければ、真の道に至ることはおぼつかないという意味です。

このことは、すべての学問について言い得ることなのですが、芸術の世界、特に音楽にあつては、陥りやすい罠なので、この点について、常に反省と努力を怠らぬ事を、心から願って止みません。

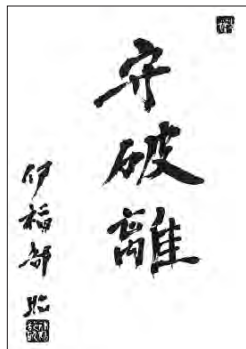
伊福部 昭

1976年4月、東京音楽大学第5代学長に就任。

出典：東京音楽大学 80 年史
所蔵：東京音楽大学附属図書館
請求番号：MO.707/T573-1
(資料より文字原稿を打ち直した)

卒業アルバムに書いた書

1976年に学長就任してから1987年に退任するまで、卒業アルバムに書を書いて卒業生に贈った(1978年と1979年は無し)。



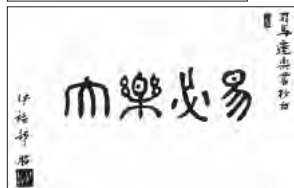
1977年「守破離」(しゅはり)

日本での茶道、武道、芸術等における師弟関係のあり方の一つ。日本において左記の文化が発展、進化してきた創造的な過程のベースとなっている思想でもある。

まずは師匠に言われたこと、型を「守る」ところから修行が始まる。その後、その型を自分と照らし合わせて研究することにより、自分に合った、より良いと思われる型をつくることにより既存の型を「破る」。最終的には師匠の型、そして自分自身が造り出した型の上に立脚した個人は、自分自身と技についてよく理解しているため、型から自由になり、型から「離れ」て自在になることができる。

参考：ウィキペディア「守破離」より (<http://ja.wikipedia.org/wiki/守破離>)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1980年「大楽必易」

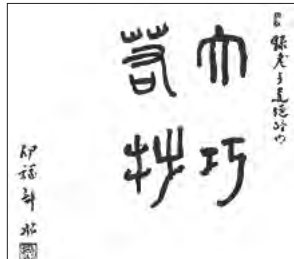
(たいがくはかならずい)

出典：司馬遷『史記』の楽書

「大楽必易 大礼必簡」の前半部分。「すぐれた音楽は平易なもので、すぐれた礼節は簡略なものである」という意の司馬遷の言葉を座右の銘としていた。

参考：ウィキペディア「伊福部昭」より (<http://ja.wikipedia.org/wiki/伊福部昭>)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1981年「大巧若拙」

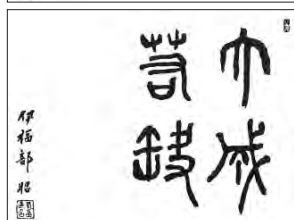
(たいこうじゃくせつ)

出典：『老子』第45章

「大直若屈、大巧若拙、大辯若訥」の真ん中の部分。「大いなる直線は屈折しているように見え、大いなる技巧は拙劣のように見え、大いなる弁舌は口べたのように見える」の意味。

参考：『老子』蜂屋邦夫訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1982年「大成若缺」

(たいせいかくたるがごとし)

出典：『老子』第45章

「大成若缺、其用不弊」の最初の部分。「大いなる完成は欠けているように見えるが、その働きは衰えない」の意味。

参考：『老子』蜂屋邦夫訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1983年「正言若反」

(せいげんははんするがごとし)

出典：『老子』第78章

「正しい言葉は、常識に反しているようだ」の意味。

参考：『老子』蜂屋邦夫訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1984年「楽云楽云」

(がくといいがくという)

出典：『論語』卷第九陽貨第十七の十一

「子曰、礼云礼云、玉帛云乎哉、楽云楽云、鐘鼓云乎哉」の後半最初の部分。「先生がいわれた、礼だ礼だといっても、玉や絹布のことであろうか。楽だ楽だといっても、鐘や太鼓のことであろうか」、つまり「儀礼や雅楽は形式よりもその精神こそが大切だ」の意味。

参考：『論語』金谷治訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1985年「正言若反」

1983年のものと同じ言葉。

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1986年「跛者不立」

(またぐものはいかず)

出典：『老子』第24章

「企者不立、跨者不行」の後半部分。「つま先でたつものはずっと立っては居られず、大股で歩く者は遠くまでは行けない」の意味。

参考：『老子』蜂屋邦夫訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー



1987年「果而勿伐」

(なしてほこることなかれ)

出典：『老子』第30章

「果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕」の真ん中の部分。「成しとけても才知を誇ってはならず、成しとけても功を誇ってはならず、成しとけても高慢になってはいけない」の意味。

参考：『老子』蜂屋邦夫訳注(岩波文庫)

所蔵：東京音楽大学付属図書館 非公開資料よりコピー

自筆の色紙



「大楽必易」

2004年、卒寿(90歳)の時に書かれたもの。
自筆の「大楽必易」としてはおそらく最後に書かれたものと思われる。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所

現代日本の音楽



現代日本の音楽

東京音楽大学が制作した10巻組のLPレコード。昭和53年(1978年)から制作が着手され昭和61年(1986年)に刊行された。ヨーロッパの音楽に重点が置かれがちなわが国の音楽教育界を顧み、明治以来の先駆者達の偉業を改めて見直そうとの意図から、日本の音楽作品の流れを10枚のレコードに集約した。

編集責任者の秋山龍英氏を筆頭に、企画・制作・演奏のすべてが、東京音楽大学の教授・講師の手で行われ。伊福部昭先生も制作委員として参加した。先生の作品は第1集(ピアノ曲I)に『ピアノ組曲』、第4集(歌曲II)に『アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌』、第10集(管弦楽曲/吹奏楽曲)に『交響譚詩』が収録されている。

所蔵：東京音楽大学付属図書館

CDの請求番号：第1集(ピアノ曲I) B1745；第4集(歌曲II) B1748；第10集(管弦楽曲/吹奏楽曲) B1754



現代日本の音楽第4集の裏表紙に掲載されている『アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌』第1曲目『或る古老の唄った歌』(Shine onne ekashi kor shinotcha)の自筆譜

出版譜では歌とティンパニのみだが、最初の発想ではコンガのパートが書かれている。

伊福部氏の愛用品



タバコ

ダンヒルの「Dunhill International」というかなり強いタバコを吸っていた。その箱に書いてある「Fumer peut diminuer l'afflux sanguin et provoque l'impuissance - 喫煙は血流を減少させ、インポテンスを引き起こす可能性がある -」という文言も気に入っていた。2001年10月に日本では販売が終了し、現在日本では手に入らない。タバコは大きな20本入りの緑の草のシガレットケースに入れていた。ライターは銀製のデュポンを使っていた。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所



ワイン

長男の伊福部極氏からホテル・オークラで飲んだロゼ・ダンジュの「ノブレス・ド・ロワール」が美味しいと勧められてから、ワインは赤でも白でもなくロゼを好んだ。ロゼは肉料理にも魚料理にも合うのが良いと言っていた。このロゼ・ダンジュの「ノブレス・ド・ロワール」は外食向けの卸のみで、一般向けの小売りは基本的にしていない。

所蔵：個人蔵



茶碗

いつも伊福部昭先生が使っていた茶碗。今も民族音楽研究所で使用されている。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所



お皿とスプーン

自宅でコーヒー豆を量ってブレンドする際に使用していたお皿とスプーン。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所



レッスンで使っていた虫眼鏡

学生の曲を見る時に使用していた。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所



コーヒー

コーヒーにはこだわりがあり、自宅で飲むコーヒーは特定の銘柄を指定して自身で豆を挽いて嗜まれていた。

また民族音楽研究所でもご自身で色々なメーカーのコーヒーを取り寄せて研究し、オリジナルにブレンドしたものを購入していた。

コーヒーにはいつもスプーン3杯の砂糖を入れるのが決まりだった。

今でも民族音楽研究所では同じコーヒーを購入している。

所蔵：東京音楽大学付属民族音楽研究所



伊福部昭 生誕百年記念 **五感で愉しむ伊福部 昭**

2014.10.6-2014.12.20

東京音楽大学附属図書館 1階

協力(敬称略)：伊福部家(伊福部玲、安部姜子、伊福部極)
豊島ケーブルネットワーク株式会社
東京音楽大学附属民族音楽研究所